

「太陽の子」

灰谷健次郎

(p.232)

キヨシ少年が、梶山先生は悩みがあるといったけれど、それは見事に当たっていたことになる。

「おまえにはええ先生でも、ほかの子にとってええ先生かどうかはわからんやろ」と、キヨシ少年はいったが、そのとおりだったのだ。ときちゃんのことをまるで知らないキヨシ少年が、ときちゃんのことをよく知っていた。毎日、顔を合わせているふうちゃんが、ときちゃんのことを知っていなかったのだ。それは恥ずかしいことだと、ふうちゃんは思った。

つらいめにあつた者は、つらいめにあっている者の心がよくわかる。どんなにやさしい心があつても、つらいめにあつたことのない人間は、つらいめにあっている人間の心の中にまで入ることはできないのだ—ふうちゃんは、しみじみそう思った。それにしても、今まで気がつかなかったけれど、ときちゃんってすごい子だ...と、ふうちゃんは思った。

(p.258)

日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦という群れがあり、つぎに、ベルサイユ条約、ポツダム宣言、下関条約、ポーツマス条約という群れがある。群れはもう一つあって、小村寿太郎、重光葵、伊藤博文、西園寺公望とあつた。

明治以後のおもな戦争に関係の探いものをそれぞれ線でむすびなさい、という問題なのであるが、ふうちゃんはみな正解だった。

「よく勉強したのか、みな、よくできていたよ。同じ問題をみんなのおとうさんやおかあさんにやらせると、みなと同じくらいできるかどうか疑問だね。それは、みんなのおとうさんやおかあさんが悪いのではなく、社会に出れば忘れてしまうような、そんな歴史の勉強の仕方が間違っていると、ぼくは思えてきたんだ」

「だけど、そうしないと中学、高校、大学と試験にとおらないよ先生」

少しおませの園田雅夫という子がいった。

梶山先生はちょっとうなずいたけれど、はっきりと園田君の意見には賛成しなかった。

「こういうものを、君たちに見せるのは、残酷なような気がするけれど、ぜひ、見てほしいんだ」

梶山先生はそういいながら、古いグラビア雑誌をとり出してきた。

女性とも男性ともわからない人が、医師の治療を受けていた。

「広島に落とされた原子爆弾の放射能で、皮膚がずる剥げになった人だ。男とも女ともわからなくなっているだろう。女の人だ。頭の毛が、いっしゅんにして抜け落ちてしまったんだね」

梶山先生はつぎのページをめくった。同じような人たちが、あちこち、むしろの上に寝かされているのだった。目が白く光っていた。

「この人たちは、やがて、みな死んでしまったんだよ。広島の被害者は三十万六千人だったというからね」

沖繩といっしょや...と、ふうちゃんは思った。三人にひとり死んだという沖絶戦のことを思ったのだった。

「この前、ちょっと話したことがあるけれど、神戸だってたくさんの人が死んだんだ。これは三月十七日の神戸大空襲の写真だ」

梶山先生は、それを神戸駅の近くだといった。ふうちゃんの学校のすぐ近くだ。

電柱が折れ、一面、焼け野原だった。市電の軌道に、馬が一頭、黒こげになって死んでいた。

みんなその写真を食い入るように見ていた。

ふうちゃんは、あっとおどろいた。

道路のはしに片づけられている黒こげの木切れやレソガと思っていたものは、じつは、焼けただれた死体だったのだ。

教室中にざわめきが起こった。

「君たちのおとうさんおかあさん、あるいはおじいさんおばあさんが、こんなめに会ってきたんだ。遠い昔のことじゃない。第二次世界大戦ーポツダム宣言ー重光葵ときちんとむすべて百点満点の答案用紙をもらっても、君たちのおとうさんおかあさん、おじいさんおばあさんの苦しみがわからなければ、なんにもならないじゃないか。死んだ人の命を、今、もらって君たちは生きているんだ。死んだ人が、なにをいいたかったのか、もし、君たちにその声をきく耳がなかったら、死んだ人は犬死にじゃないか」

(p.260) 続き

教室はしーんとしてしまった。

「みんなも知っているように、若杉とき子はおとうさんがない。若杉のおとうさんは子どものとき空襲にあって、からだの半分が燃えたんだ。人間は、皮膚の三分の一にやけどをおうと死ぬといわれている。若杉のおとうさんは運よく生きることができたけれど、ずっと虚弱体質だった。けれど、けんめいに生きて、若杉と妹を育てた。死ぬとき、今まで生きることができたのは奇跡だといったそうだ。若杉に、おとうさんがいないといって同情するのはやさしいが、そんな同情は、ほんとうの友情かな。ほんとうの友情とは、まず、若杉のおとうさんの苦しい歴史を知ることだ。知ったなら、考えることだ。そして、自分の生き方にそれを生かすことだ。そう思わないか。もっとも、これはみんなに向かっていっていることではなく、ぼく自身にしていることでもあるけれど...」

梶山先生はそう言って、ちょっと恥ずかしそうに笑った。

(ふうちゃん。ぼくはなア、きみにも若杉にもあやまらんといかん。けどなア、口先であやまるのはかんたんやけど、それはやめにした。教師をやりなおすことにしたんや。若杉の手紙を読んで、ぼくは教師やなかったと思った)

ふうちゃんは、梶山先生のことばを反すうしていた。

梶山先生、がんばりはったんやナ、口だけでなしに、なにかしやはったんや、そうでないと、あんな短い時間に、ときちゃんのことをいろいろ知るはずがあらへん。やっぱり梶山先生えらいなァー

ふうちゃんは思うのだった。

「みんなは歴史年表を作るときに、一九七二年、沖縄が日本に復帰したと書くだけだけれど、学校で勉強する沖縄は、それだけでいいのかな。恥ずかしいことだけれど、ぼくも沖縄のことは、大峯の百分の一も知らない。同じ日本人なのに、どうしてぼくたちは沖縄のことを知らないのだろう。大阪や神戸には沖縄出身の人が多いが、どうして沖縄の人は生まれた土地で働けないのだろう。歴史を勉強するということは、そういうことを考え

るということだろう、な、園田」

と、梶山先生は園田君に向かっていった。

「六四五年大化の改新、一五四三年ポルトガル人が鉄砲を伝える、一六〇三年徳川家康が江戸に幕府をひらく、一九四八年新憲法実施、そういう調子で歴史の事柄だけをおぼえる勉強はどこがおかしくないか。今、生きているぼくたちの方から歴史をたどる勉強を、はじめようやないか。若杉のおとうさんの生い立ちを調べていけば、第二次世界大戦がなんだったということが、少し、わかるかも知れない。大峯の店の人たちに話をきけば、沖縄のことが少しはわかるかも知れない。もちろん、若杉や大峯だけが勉強の場でない。みんなのおとうさんおかあさん、おじいさんおばあさん、その他身近な人たちの小さな歴史を、こつこつ集めていく。そして、みんなで考える。ぼくはそんな勉強がしたいんだ」

梶山先生の目が、きらきら光っていた。ふうちゃんは梶山先生のことばをまた思い出していた。

(ぼくはあかん教師や。もうシルクロードはきっぱり忘れて、本気で教師になりますわ)

熱っぽい梶山先生の顔を見ているうちに、ふうちゃんは、やさしいだけの梶山先生ではなく、つよい梶山先生がそこにいるような気がした。

ふうちゃんは、梶山先生に叱られているような気がした。

両親がなぜ神戸にきて働いているのか、深く考えたことはなかった。てだのふあ・おきなわ亭という琉球料理の店が、なぜ神戸にあるのか、そんなことは一度も考えたことがなかった。

(p.276)

そして自分が今、どうすればいいのか迷ってしまっているということを、できるだけくわしく書いた。

「...どうすればいいのかわからないのに、わたしは今、すごく知りたいのです。おとうさんのこと、おかあさんのこと、おじいちゃんのこと、キヨシ君のこと、ろくさんのおじさんのこと、ゴロちゃんのおじさんのこと、ギッチョンチョンや昭吉くんのこと。みんなは、わたしをとてまかわいがってくれます。わたしをかわいがってくれる人を、わたしがよく知らないとしたら、わたしはただ、人に甘えているだけの人間になります。わたしをかわいがってくれる人は、わたしをかわいがってくれる分だけ、つらいめにあってきたのだということが、このごろのわたしには、なんとなくわかるのです。

だから、わたしはいつそう、みんなのことを知りたいのです。知らなくてはならないことを、知らないで過ごしてしまうような勇気のない人間に、わたしはなりたくありません。そんなひきょうな人間になりたくありません。先生、お願いします。どうかわたしといっしょに考えてください。学杖の勉強のためではなく、わたし自身のために、どうかわたしと

いっしょに考えてください」

ふうちゃんはそう書いて、手紙を結んだ。手紙は便せんにでなく、大学ノートに書いた。手紙は何回もつづくだろうという予感がしたからだった。

梶山先生の返事は、つぎの日に来た。

「手紙を読みました。返事を書いて返します。ふうちゃんの手紙は、ぼくを力づけてくれました。ありがとう。ふうちゃんが手紙の最後に書いてくれたことばは、小学生のことばとは思えなかった。

『知らなくてはならないことを、知らないで過ごしてしまうような勇気のない人間になりたくない』

—なんとすばらしいことばだろうと、ぼくは胸が熱くなりました。こんなに、けんめいに生きている子どもが地球上に、しかも、ぼくのクラスにいるかと思うと、ぼくは教師になってよかったなあと、しみじみ思いました。けれど、ふうちゃん。あなたの手紙は恐い手紙でもありました。教師はなにをすべきかということ、あなたの手紙が衝いているからです。知らなくてはならないことを、知らないで過ごしていたのは、あなたでなく、このぼくです。キヨシ君に、ろくさんというおじさんに、きこうとしてきけないあなたのやさしさと苦しみを理解することのできなかつたぼくは、教師失格ではなく人間失格です。そんな教師が、どうして血の通った日本の歴史をあなたに教えることができるでしょう。ぼくは今、深く恥じています。ふうちゃん。あなたといっしょに歩むことを許してください。今、ぼくはふうちゃんの考えることを、いっしょに考え、ふうちゃんの悩むことを、いっしょに悩む教師であることで、ふうちゃんと手をつなぐことができると考えています」

梶山先生の手紙は、まだまだつづいていた。

なにもかも一度に知ろうとしないで、小さいことでもいいからできることからやっいていこうということ、沖縄の場合は書物で知ることができる事実もたくさんあるので、そっちの方から、聞き書きをはじめする方法もあるということ等々、梶山先生はこまかいところまで、ていねいに書いてくれていた。

ふうちゃんがなによりもうれしかったことは、それを、いっしょにやろうと梶山先生がいてくれたことだった。

「ふうちゃんがいっしょうけんめい手紙を書いてくれたように、ぼくもこの手紙をいっしょうけんめい書きました。子どもだからとか、小学生だからとか考えて書いたところは少しもありません。そのために、いくらかわかりにくいところがあったとしたらがまんしてください。くりかえし読むことで、...

(p.312)

キヨシ君に、おまえは得手勝手な人間やと叱られたけれど、ほんとに得手勝手な人間になれたら、人間ちゅうもんはきらくなもんやな...と、ふうちゃんは思った。

いい人ほど勝手な人間になれないから、つらくて苦しいのや、人間が動物とちがうところは、他人の痛みを、自分の痛みのように感じてしまうところなんや。ひょっとすれば、いい人というのは、自分のほかに、どれだけ、自分以外の人間が住んでいるかということ
で決まるのやないやろかと、ふうちゃんは海を見ているゴロちゃんやキヨシ少年を見て思った。

そう思うと、キヨシ少年もゴロちゃんも、かけがえのない人間に思われた。オジやんはいうにおよばずギッチョンチョンも昭吉くんも、それからギンちゃんも、ろくさんも、桐道さんも、てだのふあ・おきなわ亭にくる人はみんな、かけがえのない人なのだった。そんな人にかこまれて暮らしている自分はほんとうにしあわせなんやなと、ふうちゃんは思った。

ふうちゃんはおかあさんの肩に、そっと手をおいた。おかあさんはその手を、やさしく握った。風が二度三度強く吹いた。

(p.352)

先生、人間っていったいなんですか。おとうさんもろくさんのおじさんもキヨシ君もとてもやさしい人です。気の遠くなるほど恐いめにあってきている人が、とてもやさしいだなんて。わたしもきのう体験したばかりだから、はっきりいえませんが、あんなに恐いめにあったら、もう外のことはどうでもいい、人のことなんかどうでもいい、なんでもいいから助けてくれえといいたくなります。人をうらみたくもなります。キヨシ君がはじめのうち、ぐれていたのも今ならよくわかります。そんな人がみんなやさしくて、他人のことを人一倍考える人だなんて。先生、キヨシ君はね。一回目の手術のとき、まだ元気なときだったんだけど、わたしにどんなことをいったと思いますか。ショウヘイのこと、あんまり悪うおもたんなや、あいつらもおれといっしょで、いろいろあるやつやさかいな—そういうんです。ショウヘイというのはあのチソピラのたいしょうです。あんなにひどいめにあわされているのにキヨシ君は、チソピラをかばっているのです。先生、わたしは今まで、おとうさんやおかあさんをふくめて、わたしのまわりにいる人たちをやさしい人だとは思っていましたが、えらい人だとは思っていませんでした。えらい人というのは、えらい政治家や、すぐれた仕事をした芸術家や学者や、名の残るような実業家というような人たちを思っていました。今わたしは人間がえらいということはそんなことではないと思いはじめています。とても大きな問題なのでうまくいえませんが、どんなにつらい時でも、どんなに絶望的なときでも、本気で人を愛することのできる人がえらい人なのだと思うのです。キヨシ君やキヨシ君のおかあさんを見ていると、そのことがすごくよくわかるのです。キヨシ君は、おかあさんにさかっているけれど、それはおかあさんをほんとうに愛したいと思うからそうするのです。キヨシ君はきびしい人です。人を愛するということがきびしいことなんだなあ、とつくづく温めます。学校でよく、人の命は地球より重いとか、一人の命はなにものにもかえがたいとかお説教をする先生がいますが、そんなことを子ども前で口先だけで話しているような先生は、ほんとうにそのことばの意味を知らないんだと思います。人の命がほんとうに重いということを知ってるのは、キヨシ君のような生き方をした人にだけにわかることなのでしょう。キヨシ君が死ぬかもしれないと思っただけで、わたしは苦しくて苦しくて、麻酔薬でもなんでもうって気絶させてほしいと思っただけです。そんなにも苦しいことをもったもった苦しいことを、キヨシ君やキヨシ君のおかあさん、ろくさんのおじさん、それからわたしのおとうさんたちは、ごまかさず、じっと見つづけてきたのです。たくさんのおじさんのおじさんとはそうして生きてきたのです。えらい人たちというのは、こんな人たちのことをいうのでしょうか先生。いたずらをするカラスと仲良く暮らした話とか、台風の時草花を部屋に入れてあげた話とかをおとうさんからきいたとき、沖縄の人たちはやさしいなと思っただけでしたが、今はもっと深い意味があったことを知りました。沖縄の人がすべての命を大切にするのは、これまでにたくさんのかんしい別れをしてきたからなのですね。ずっとむかしは人頭税というとてもひどい税のために、マラリアという伝染病のために、そして沖縄の戦争のために、たくさんのおじさんの命が消えていったり離ればなれになったりしたのでしょ。沖縄の人にはそんなつらいかなしい思いがあるのですね。つらいかなしいめにあってきた人はど、そうしてはならないという思いも人一倍つよいはずですね先生。そんなふうに考えると、沖縄の人がなぜやさしいのか、てだのふあ・おきなわ亭にくるおじさんがなぜやさしいのか、少しわたしにわかるような気がしたのです。先生、わたしは一日の間にほんとうにいろいろなことを考えました。